

世界で一番低い山

は沼略記
・農耕・水の境
序章 世界で一番低い山



亀

田町(現新潟市)が発行した『亀田の歴史こぼれ話』には、次のような記述がある。

「畠田甚句に読み込まれている稻葉の山は高山に継ぐ丘陵地帯の中でもひときわ高くそびえ立つ文字通りの山であつた」(『稻葉神社は』) 石の階段を三十一段登り、山頂の境内に達したものだつた。幕末の『亀田八景』には「稻葉の暗闇」と讃えられ、観天望氣の見晴台であった。

「向山は二百五十年前の宝曆年間、人々の立ち入りを許さない『荒砂山』であつた」(『亀田は亀田町の人々がそう呼んで、袋津の人々は大山と唱え、北山であつた。

在でも実に三分の二が日本海の平均潮位より低い。島屋野潟にいたつては海拔マイナス二・五メートル。この島屋野潟を底にして全体が大きな皿のような地形になつていてある。

そこへ日本有数の大河である信濃川、阿賀野川などが流れ込み、時に潮流となつて押し寄せた。

中世まで、この地には十九におよぶ大小さまざまな潟湖があつたといふ。潟湖とは、むかし海であったところが外海と分離されてできた湖のこと。

今でこそ日本屈指の美田を誇る亀田郷も、むかしは一面に苔の生い茂る「呑沼」とも呼ばれ、浅海とも沼とも川の中洲とも判別のつかぬ水没しの大地であつた。

撮写真を見ると、集落群(居住地域)が全体に右上斜めの縞状になつていてることが分かる。現在は多くが市街化されて不明瞭になつてゐるが、この地には数本の砂丘が平行並んでいる(黄色い破線)。砂丘の高さは一~数メートル。この水没しの島の中で砂丘の上だけが人間の暮らせる場所であつた。太古、人々はこのわずかに高くなつた凧を「山」と呼んで集



図1 亀田郷(地図の製作には、国土総務省発行の農耕地図およびカシミール3Dを使用しています。航空写真提供:デジタル・アース・テクノロジー)

は十兵衛山と呼んだ。この砂丘を開拓した人々が愚敏の念を持つて眺めた丘であつた」。

亀田郷を知らない人がこの文章を読めば、さぞかしつづきな山の姿を想像するであろう。

しかし、ここに描かれた稻葉山、向山などは大昔にできた砂丘の跡であり、標高はせいぜい七八メートルに過ぎない。

この地には他にも城山、茅野山、舟丸山……、と山のつく地名が異様に多い。ところが、そこは周囲の土地よりも數メートルほど盛り上がつているだけの

うつすらとした微高地であり、他所から来た人は勾配にも気づかない程度のありふれた住宅地である。

しかしながら、このわずか数メートルに満たない土地の高低差こそが、何百年と続いたこの地の生活の明暗を分けたのである。

亀田郷――図1で示せば、信濃川、阿賀野川、小阿賀野川、そして日本海で囲まれた、東西一キロ、南北一〇キロに及ぶ約一万ヘクタールの地域である。

この三つの川に囲まれた土地は、現

でもあつた。

さて、亀田郷の農について著した書物は少なくない。亀田郷の歴史は、その特異な風土、劣悪な農地、過酷な農との闘い、それを見事に克服した近代的土改改良事業の快挙、あるいは農民運動の激しさ、近年の先進的な地域づくりなど、どれを題材にしても奥が深い。

古来、日本において水田を造るとは水路を造ることを意味した。水田には大量の水が必要。農民の心配事の大半は水不足であり、このため村々では争いが頻発した。

しかし、この亀田郷における水田造りとは何よりもまず水の排除であり、洪水との闘いであつた。この点において、亀田郷の農は極めて特異な歴史を歩んできたと言えよう。

しかし、この海拔以下の水郷地帯で、小舟を探り、腰や胸まで泥に浸かりながら産物を得る、いわゆる「宝の山」は確かに高かつたのである。

さらに、この「山」は田畠、森などにとつてみれば、これらの「山」は確かに高かつたのである。

排水という観点から、この亀田郷農民の凌まじい水との闘いぶりを振り返つてみたい。

本冊子は新親松排水機場の完成(平成二十一年)を記念して刊行するものである。

排水という観点から、この亀田郷農民の凌まじい水との闘いぶりを振り返つてみたい。